

# メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第51号

[2013年4月号]

メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。  
JAM 会報メール第51号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ／ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へJAMの最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。  
今後ともどうぞよろしく願いいたします。

<目次> [ページ]

メソトマンスリー	[2]
国内から	
・ <a href="#">NPO 設立総会</a>	[3]
国際保健医療協力のなかで (20)	[3]
今月の一枚	[4]
編集後記	[4]
次号の予定	[5]



メソトマンスリー

きょうのゆめ



【メソト=前川 由佳、田畑 彩生】

クンカーン29歳、シャン州出身、パオ民族の彼。  
お父さんは60歳、村へ帰っておいでと電話口で良く言われるそうです。

お母さんは5歳の時に亡くなりました。  
5人兄弟の4人目で、下の妹は、ヤンゴンで法律の勉強をしています。  
高校を卒業してから、パオ青年同盟に声をかけられ、メーソートへ。2004年にメータオ・クリニックへ来て講習を受け、ここで働き始めました。今では、6~7年、学校保健で働いています。

子どもをあやすのが上手な彼。  
「子どもの世話をする、一緒に遊ぶのは趣味なんです。」  
と嬉しそうに満面の笑みで答えてくれました。

「2006年と2009年に2週間村に帰って健康保健教育をしたんだ。  
その時にビルマの情報局の兵士が来て、何をしているのかを問われるのを恐れて、ずっとお坊さんと一緒に行動したんだよ。  
そうすると取り調べされず捕まる可能性が低くなるって思ったの。  
今は分からないけれど、前はメータオ・クリニックから来たと言ったら捕まる恐れがあったんだよ。」と当時の様子を振り返ります。

「将来の夢は、自分の村に帰って、村で健康教育をしたいな。  
村には、健康に関する教育を受けられる機会は無くて、村人は病気や健康に関する知識がほとんどないんだ。だから皆、分からない事が多い。  
何も分からない人へ、いちからひとつひとつ説明して教える事は、とても大変な事なんだよ。  
だけど、自分の民族の為になる事だから、とてもいいことだよ。この仕事が好きだよ。」

今回は、6月頃に村へ一時帰省し、また健康保健教育をする予定なのだとのこと。

これからも村の健康問題について真剣に向き合いたいと語ってくれた彼の眼差しは、遠い村の人々を想うかの様に、優しさにあふれていました。こんな素敵なスタッフと一緒に働ける事の幸せを噛み締めています。



国内から

## NPO 設立総会

【東京＝梶 藍子】

4月13日（土）アウンサウン・スーチー氏が約27年ぶりに来日されると大きなニュースがメディアで報じられた日、メータオ・クリニック支援の会でも大きな動きがありました。

昨年度から進めていた計画、NPO 法人メータオ・クリニック支援の会の設立総会を無事、都内にて開催することができました。当会は、任意のNGO 団体として活動し、今年で設立6年目となります。今後は、任意団体としてではなく、日本でも多くの方にこのクリニックの存在を知ってもらい、また広く社会に責任と権限を有する自立した団体となるため、この度NPO 法人の設立申請の運びとなりました。

今月末にNPO 申請書類を所轄庁へ提出し、2カ月の縦覧期間を経て、審査を通過すれば、認証を受けたNPO 法人メータオ・クリニック支援の会としてさらに活動の幅を広げていく予定です。無事に設立6年目を迎え、現地のメータオ・クリニックで途切れることのない活動を続けられるのは、当会を支援して下さる皆様のおかげだと感じております。

いつも温かいご支援、本当にありがとうございます。

## 国際保健医療協力のなかで （20）

【東京＝小林潤】



4月から沖縄の母校に戻り、教壇に立つことになった。

12年前、母校のラオス国プライマリーヘルスケア事業・マラリア対策事業が一応終わり、成果は高く評価されるも、国際協力のありかたに疑問をもち、日本の国際協力の中心でやってみたいという気持ちが強くなった。

若気の反骨精神があったのだと思うが、助教授にさせていただきながら、2年もたたずに東京の国立国際医療研究センター国際医療協力局のヒラ職員に異動した。このあとは東南アジア、アフリカ各地を巡って自分なりの哲学を形成できてきたことは、大学のなかでの地位・名誉獲得では絶対に得られない、大きな収穫だった。

赴任後、すぐに同窓会から、後輩の学生諸君あての講演を依頼された。この20年の国際保健の変遷をまのあたりにみてきたので、ぶつけてみようと思っている。

1990年代、日本は国際保健分野では新興国として手さぐりの状況が続きながらも、知らない間にトップドナーとなり華々しい時代だった。2000年代は国際パートナーシップのなかでの立ち位置を求められ、ドナーとしてのプレゼンスや学問としての国際保健も築かれていった。さて2010年代は、グローバリゼーションの好き嫌いは問わず、これ抜きには語れない状態になっている。



援助というものからできあがった国際保健学が大きくシフトしている。  
世界は南北といった単純構造ではなくなっている影響であろうと思う。  
開発途上国とイコールパートナーとして共に地球を考える姿勢が求められている。しかしながら、途上国の「プロプア：貧困救済」の問題は解決していない。

国際保健は考える学問だと思っている。10年前の正解は、今の間違いになっていたりする。先人の功績を尊重しながらも、「なぜやるのか？どうやるのか？」を自分で考え、自分で選択できる後輩を作りたいと思う。こういうチャンスが得られたのも母校の恩師や先人の国際協力への開拓が導いてくれたことと、いまさらになって感謝している。私を踏み台にして世界に出ていく若者がでることが恩返しだと思っている。

## 今月の一枚



今日は、お仕事お休みです。メーソートのみんなが楽しむ、水かけ祭り！  
水てっぼうなんかじゃ追いつきませんから、ホースで参戦です！

## 編集後記

今年も、夏にスタディツアーをする予定です。  
日本事務局のスタッフは、全員、生計をたてている仕事があるのでツアーの引率者は、まず、そっちのお休みの調整をつけなければなりません。  
なんせ、メータオクリニックがあるメーソートの街は、国境に近いわけで、バンコクから遠く遠く離れたところ。週末の連休だけでは足りなくて・・・。

また詳細が決まれば、皆様にお知らせいたします。  
学生さんが参加できるように7～8月のなかで調整しています。  
なかなか、観光ツアーでも行くような場所ではありませんが、百聞は一見にしかず。  
ぜひ、参加をご検討していただければ、幸いです。



